

＊ ＊ 私たちの住む金田村の記憶 ＊ ＊

(2022. 5)

個人の生活 (その2) < 寺田縄 Nさん >

青年団で、朝野六郎さん(入野)金田の歴史を教わろうと話を聞く機会を設けたが、先生曰く「金田に歴史は、無いよ」と言われたのを良く覚えている。

寺田縄の吉川さんは、学習院でピアノ教師をしていて昭和天皇の皇后陛下が教わった。

金田地区は、農業が中心の農村で無医村だった。農作業は腰をかがめて行う作業が多かったため、体位を改善するため、吉田先生(医者)を招聘し、健康指導を受けた。

バレーボールは、石川京一(後の平塚市長)さんの発案で、中島村長とともに推進された。健康改善のため、バレーボールを各家に一個ずつ配り、盛んにバレーボールを奨励した結果、全村挙げてのバレーボール村となった。それが認められて、神奈川国体の時、天皇・皇后の行幸・行啓を受けた。

小学校の校庭の西側に健民館を作った。一階は職員室、二階に二部屋あった。

日枝神社の祭りと新幹線工事とが重なり、全国から作業員が寺田縄にも来るため、問題がおきると困るので、祭りを中止した。

金目川の花見は、本当に賑やかで、見やすい場所をとるのに、早くから金目川の土手に行き、場所取りをした。

現金収入に乏しく貧乏な村だったので、小学校の時には、田植えをして米を売り修学旅行の資金の足しにしたこともある。(溝植え)

金目川の河川敷の報国農場と呼ばれた畑に、サツマイモを栽培し、肥料にするために、小学生二人で下肥を天秤で担いで運搬した。

寺田縄自治会館の土地は、金田の村営住宅跡地に建設された。長持(かすみ町)にもあり、戦争から帰り、家のない復員者たちが優先的に使用していた。

自治会館の必要性を考え、平塚市に対し、建物は土台も傷んでいるので使用に耐えな

いと交渉し、会館の建設を進めた。このようにして会館の用地が確保された。寺田縄公園（カップ公園）も同様であった。

寺田縄の石塚豊作さんは、当時は少なかった馬耕の第一人者で、奨励者でもあった。馬につける農機具を工夫しギヤ、ベルトが採用されていた。

役場から生産増強のため、鍬、鎌、の配給があり「むしろ」は、必需品・消耗品でもあり村に作業所があった。

戦後の復興として、先ずは、小学校の再建（戦争で消失）だった。（中郡では最初）建築用の木材の調達では、秦野のきこりに依頼して、木材を切り出してもらった。きこりの作業代として、一日当たり米一升が支払われた。お金での支払いではなかった。

木材の運搬は、村で牛車を持つ人が出し、秦野から運搬した。製材作業は、校庭を使用し、校庭は、製材所のようにであった。村の大工7、8名が作業した。作業は、皆、手弁当だった。

完成までに一年ぐらいかかり、職員室と教室ができた。健民館は、校舎について建設された。

学校の校庭に畑を作り、帰宅後は、家の手伝いをした。手伝わない者はいなかった。冬には、子供が農道の芝焼きをやった。

寺田縄の小町ごとに、子供たちのボスがいた。子供同士の喧嘩はなかった。が、鈴川をはさんで、豊田とは争った。

稲作のための用水をめぐる、田植え時期には水上の金目と飯島の「立場」（飯島バス停付近）あたりで鎌、鍬を持ち寄って、争いになったこともある。金田に水がない時、上流の金目は、余れば金田に水をやるとの態度だった。金田には水が不足するので、金目と水をめぐる争いになった。

水田の耕地整理は、高橋村太郎村長の時代に完成した。その後、暗渠排水が施され、水田の後には、麦が植えられ、金田地区は二毛作ができるようになった。

田植えは、7月7日（真田の天王さんのころ）まで、稲刈りは11月ころだった。その間も農作業が続けられた。農協がモーター付の耕運機をとりいれ、農作業が簡易化され、外征した男に代わって女性が担えるようになった。

昭和30・1年ごろ農機具のコンテストが開催され、メーカーが全国から選手を集め、

金田が会場になった。畜耕（馬や牛を使う）から耕運機に転換する時期だった。中郡の他の地区は受け入れを拒み、金田が受けた。

金田小学校東側の水田が会場となった。青年団が昼食を販売し、集まった選手は、農家に分宿した。

金田の選手は、石塚菊夫さん。農業総合研究所の視察も兼ね皇太子の行幸があり、道路に玉砂利が敷かれた。

皇室に奉納する献上米は、高橋村太郎さん宅の五畝ほどの広さの水田が充てられた。竹垣で囲われた水田で白装束のいで立ちの作業。秋、無事に収穫できるまでの管理が大変だった。

金田地区は、農家一色、農作業をするので遊んでいる人は誰もいなかった。

寺田縄の吉祥院は、関東地震の時、倒壊した東善寺と合併し現在地に再建された。時期は、昭和初期だった。吉祥院の山号は、東善寺の山号を継承し、瑞雲山から山王山と変更された。東善寺の碑は、南の墓地内に建立されている。

中卒で入団する青年団は、用水の堰止めや地域の祭りの主役として活躍した。

生活改善は、台所の改善などに成果を挙げ、農業関係紙「家の光」に取り上げられた。婦人会の活動も盛んで中郡からの視察があった。

平塚大空襲の時、農村地帯の金田地区が爆撃を受けている。爆撃を知り、角田さんと中島俊雄さんの二人が農業会に駆けつけた。農業会には、米、書類が保管されていた。書類を守る二人の間に焼夷弾が落ち、書類は焼け、角田さんは耳に怪我をした。

農業会の建物は消火できず、書類のみならず、保管の米も焼けた。焼け焦げの米は、後日、配給された。肥料に使ったのかは、不明。

爆撃の目標になった理由（巷間では）ははっきりしないが、金田の各家庭には、海軍火薬廠で使われていたモーター、ベルトなどが一時分散避難のように保管されていた。金田村が保管に協力したのかは不明だが、米軍の偵察か、また事前に情報が漏れていたか？ 何か書類が保管されていたかについては分からない。自分は小学校3年頃だったと思う。

焼夷弾が投下されると、あたりは昼間のように明るく、弾はバラバラと落下した。

先祖の位牌を持ち、岡崎からの排水路のトンネルの中に布団をかぶって、逃げた。
焼夷弾は水田や道路に落ち込み、落下して突き刺さっていた物もあった。

金田地区は、金目、岡崎、平塚市に挟まれたところで貧しい村落であった。生活用水は豊富で、つるべ井戸から、掘り抜き井戸に変わり、ポンプでのくみ上げと移行した。

農業総合研究所の建設の用地買収は、中島村長の時代に県との交渉に当たった。村長退任後は、石川京一さんが担当し建設にこぎ付けた

古川排水路は明治37年の耕地整理のとき、改修され、直線化された。

金目川の旧河道と思われる痕跡は、石川英夫さん宅の基礎工事のとき、川石がたくさん出たので、川だったことが推測される。流れは、おそらく、石川宅脇を東に流れ、鈴川へ流入していたと思われる。入野地域を斜めに横切っていたようだ。今は、小さな排水路として姿をとどめている。

飯島では、集落の北側の道路わきに生活用水（本町南の用水）を流し、きれいな水で、鮎が泳ぎ、コメをとぐ、茶わんを洗う等に使っていた。その後の落ち水は寺田縄に流し水田の用水として使われた。

冬の乾燥による防火のため、古川の排水をせき止め、「冬の用心水」として管理していた。

地域活動の組織として、青年団の上に青年会が組織されていた。
青年会は後継者がなく消滅していて、20歳までだった青年団所属を25、6歳までとして人員を確保し活動していた

青年団の活動費は、自分たちで稼ぎ出していた。親に貰うなどしないで自分達で調達していた。その方法としては、行事に模擬店を出す。「溝植え」といって水田の余った溝などに苗を植え、収穫し、供出する。3俵程度の玄米が収穫出来た。供出には、特定の親の名義を借り、その代金を活動費とした。

要は「自分達で稼ぎ、自分達で遊ぶ」に徹した。さもないと、親や世間体にも悪い。すごく纏まりも良く、活動し遊びもした。

本田平八さんが音頭とりになり、交換ノートのような物をつくり、自分の思うことを自由に書き留めて、回し読みするという方式だった。きわどい内容もあったが、人の考えを知り、自分でも書き込め、個々の思いが記されるので、たいそう楽しみなノー

トだった。

しかし、いつしか駐在の知るところとなり、平八さんは駐在からお叱りを受け、ノートは没収されたようだ。思えば、惜しいことであった。

悪戯もした。追分の赤提灯で呑み、酔いに任せて、帰りがけに豊田で干し物を他に掛け変えたり、かなり重いお地藏さんを道の真ん中に移動させたり、悪戯もした。怒られるのは大抵平八さんだった。

< 以上 >